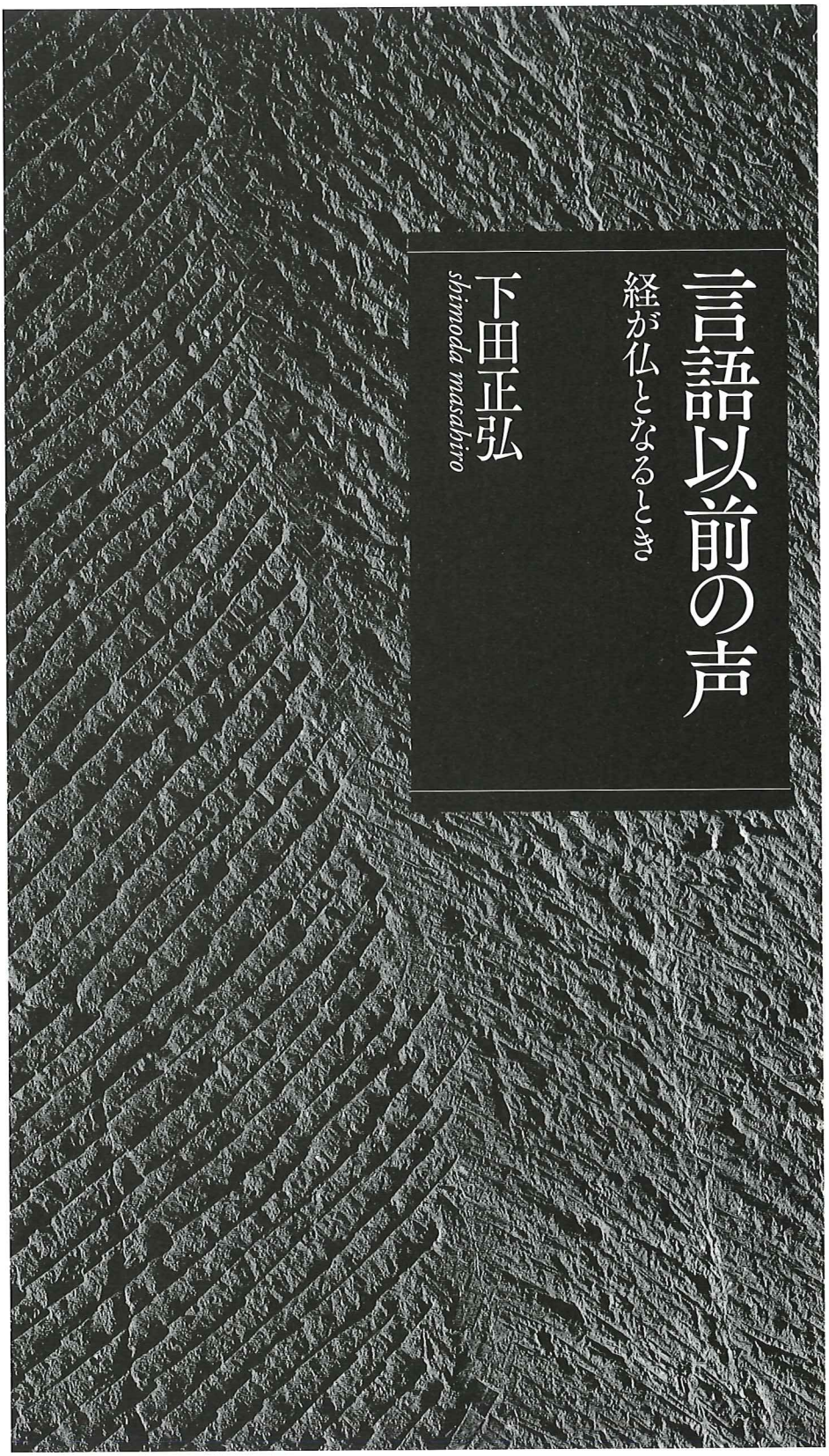

歴史のなか、ひとびとは、ときに、想像を絶する苦難を受けてきた。ある種の苦難には、だが、意識は耐えることができない。苦難のできごとは、当人の意識にとらえられることがないまま、鮮血の流れてやまない傷口を潜

在意識に抉り出し、まるでなにごともなかったかのように通り過ぎてゆく。ホロコースト、原爆、戦禍、大震災。想像を超える苦難から逃れるための、ほんの一瞬のいとまが与えられず、真の意味で犠牲になったひとびとは、あろうことか、みずからが身に受けた苦難を、自身の声として地上に遺しえないように、そもそも運命づけられている。苦難によって、存在は、まるごと、跡形もなく消し去られてしまうのだから。

では、苦難が地上に存在するとは、いったい、どのようなことなのだろうか。

苦難は、その場で把捉され存在しはじめることは、ほとんどありえないだろう。だが、それは通り過ぎるさい、生命に傷を刻みつけて跡を残す。苦難のできごとに蹂躙されながらも、なにがしかの縁を与えられて生き延びたものたちは、残された傷痕にふれたとき、苦難を口にしえず無言のままに過ぎてしまった過去の自分の面影に動かされ、ことばを発することなく死に絶えたものたちの相好に照らされて、あらためて苦難の事実に目が覚める。やがて無言だった自身の内には声が喚起され、ことばをもって苦難の証言者として語りはじめる。事実を語るみずからの声が自身の内部に響くとき、かつてなかった熱い血潮が通いはじめる。過去に凍結した経験をふたたび現在に解き放つときがめぐり来たのである。

ひとびとは、受けた苦難の意味を、みずからの潜在意識に残された傷口を探し出して問い、他者が経験したであろう苦難の意味を、地上に刻まれた他者の痕跡に求め、当事者からはついに生まれ出ることのなかった声を、その代現前（表象）representationとして、生き延びた自己の生涯をかけて生み出そうとする。

だが、過去を証言するさい、誠実になろうとすればするほど、あかしを立てようとすることばと過去の苦難の事実とのあいだには埋めようのない「すきま」や「ずれ」があること、つまり証言はいつでも「虚言」となってしまいかねないことを、ひとはそれだけ強く意識せしめられる。証言は「すでに遅すぎる」ことを悔い、ことばに沿ってこぼれ落ちてゆくものを見つめつづける、あてどない行為である。だが、苦難がそのものとして存在しえないのなら、遅すぎる声を残された傷痕に重ねあわせることが、生き延びたものたちが、苦難を苦難として表出しえなかったものたちに対して応答しうるということ（責任）responsibilityではなかろうか。

自分の周りの誰か、誰か自分でないものから、自分のいちばん深いさびしい気持ちを、ひそかに荘厳してくれるような声が聞きたいと、人は悲しみの底で想っています。そういうとき、山の声、風の声などを、わたしどもは魂の奥で聴いているのではないでしょうか（石牟礼道子「名残の世」『親鸞――不知火よりのことづて』）

苦難を受けた身にとって、ことば以前のことば、むしろ声の存在が、なにゆえにこれほど切実なのであろうか。深すぎる悲しみや寂しさは、ことばとともに、身体から声を奪う。声を奪うことによって、生体そのものを沈黙させることによって、悲しみであること自身を、寂しさであること自身を、すっかり消してしまおうとするのだ。いのちが産声を上げて誕生するように、悲しみが悲しみとなり、寂しさが寂しさとなるためには、すなわちひとの内的情動が情感となるためには、ひとに固有の音を得ること、つまり声を得ることが必要である。

だが、苦悩が、悲しみが、寂しさがあまりに深すぎて、声が自身の内から生まれ出ることができないとき、ひとはどうすればよいのだろう。乾いたポンプで井戸の水を汲み上げようとしてかなわないとき、ポンプの弁を潤す水を外から施すことによって、その水に誘われるかのように大地の底から水が湧き上がってくる。あたかも外から流しこまれた、わ

ずかひと桶の誘い水が、内から無限の水を湧出せしめるように、声が外から与えられるとき、その声に共鳴して自身の声の弁は潤って震え、渇きによって遮断されていた内部からの声を呼び起こす。

対話が、ひとにいのちを与えるときがあるとするなら、それは声をもちえなかったものに声が与えられるときであろう。深い次元での対話が実現することは、ことばの意味が遣り取りされることではない。意味になる以前の声が、有形と無形のあわいをゆきかう律動として、両者のあいだに呼び起こされることである。この共感のなかにあって、こころの内でかたちになりえていなかったものはかたちとなり、かたちになって居すわっていたものはかたちを変じ、あるいは消滅する。

溶質が限度まで溶かされた飽和溶液に、ほんのひと粒の溶質が加えられたとき、透明だった溶液は瞬時に濁り、溶質が結晶として沈殿する。かたちをもたなかった意識に声が届くとき、その声に呼び起こされて、意識のなかにはかたちが生まれ出て、意識全体の様相を一変する。それは無形の世界から有形の世界への転換であり、意識に存する千変万化の万象は、じつは、この有形の世界への転換の一瞬から生み出されたものばかりである。

●

古来、あらゆる教理や哲学からほとんど無縁であったひとびとが、ひとえに神の名を讃え、ひたすら仏の名号を称するという行為を選び取ってきたのは、神が、仏が、名という声として届いたとき、意識の内にその声に呼応する神や仏の、名の原型が存在として生み出されるからではないだろうか。

じつにアーナンダよ、十方のそれぞれの方角にあるガンジス河の砂の数にひとしいもろもろの仏国土において、ガンジス河の砂の数にひとしい諸仏・世尊は、かの世尊アミターバ（阿弥陀）如来の名を賞讃し、讃嘆し、名声を宣揚し、特性を称揚する。…〔中略〕…およそいかなる衆生であれ、かのアミターバ（阿弥陀）如来の名を聞き、聞きおわって、たとえ一度でも、深い願いをとおして浄らかな信をともなうこころを起こすならば、かれらはすべて「無上のさとり」から退くことのない境地に立つであろう。（『無量寿経』筆者訳）

寂しさが、悲しみが、苦悩が深すぎて声を奪われたものたちに、だれか他なるものの声として仏の名が届くとき、その名は自身の内部に共鳴し、奥底に降下して意識の底辺を揺らす。意識は、この声の振動に揺り動かされ、やがて同じ振動を自身の内に生じさせる。こうして気がつけば、自己の身体から同じ仏の名を呼ぶ声が生み出され、仏の名を呼ぶ声は自分自身から発せられた響きへと転じられている。

ひとつの存在を名としてさし示す声が意識に生まれるとき、意識のなかにはその名に応ずる存在が呼び起こされる。かたちなき意識の晦冥に、仏という光輝を究めた存在の原型が忽然と出現するとき、暗くたちこめている霧の粒子ひとつひとつは、その存在から発せられる光を受けて反射し、意識の闇全体を光へと転ずる。

仏の名が自身の声となって身体の外に生まれ出ると、他者の称名の声によって意識の内に生まれた仏という光源は、気がつけば自己の全体を身体の外からつつみこむ光となっている。仏の名を称える他者の声を聞いてみずからが仏の名の声を称え、自身の意識の内に生まれた光に自身が外からいだかれるという、この一連の転変は、ほんの一瞬のうちに起こっている。ひとりの修行者のなかに「無上のさとりから退くことのない境地に立つ」確信が出現するのは、意識の濁った昏冥を照らす「浄らかな信をともなうこころ」が生まれる時刻と、わずかも隔たってはいないだろう。

●

ことばを知ったものが発する声は、声を発する一瞬前に、こころがことばになりゆくか

たちを、すでにさき取りしている。それゆえ、思わず漏れ出た声は、その声によって、ひとをいたわり、育み、励ましもすれば、傷つけ、萎縮させ、絶望さえさせてしまう。声が伝わるとは、手の加わらないこころのかたちが伝わることなのである。

こうした他者の声が、自己の意識の昏（くらがり）に入って力ある存在へと変ずるとき、意識の内部には、声を響かせて存在へと現成させるなにがしかの経験があらかじめ存在している。声は意識のなかにある経験を共鳴板として反響し、かたちになる。この過程が反復されれば、やがて意識は、声を聞くだけで存在そのものを認めるようになる。名がなにかをさし示すとは、こうした事態をいう。

重すぎる苦難によって声を失ったものたち――。受難者たちの意識の内に仏の名が声として届くとき、その称名の振動から仏を出現せしめる共鳴板となるもの、それは意識が把握しえなかった、過去の苦難の傷痕である。生き延びたものたちが過去の痕跡に自身の声を重ね合わせ、歴史の証言者として苦難の事実にいのちを与えるように、仏を呼ぶ声は意識の奥に隠れていた苦難の傷跡に届き、そこに共鳴して仏を呼び起こす。

それはあたかも、苦難が仏の徳として出現したごときできごとである。苦難の痕跡は、視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚、さまざまな知覚を胚胎（はいたい）したままに凍結されて、生まれることのできなかった経験である。その痕跡に、仏の名の声が届いて響くとき、痕跡のうちに凍結されていた未出生の経験は、仏の名の呼び声によって生命を復活する。こうして生まれた経験は、すでに仏の名に包摂されており、この過程をおさめた一瞬は、まるで苦難のできごとから仏が誕生したように見える。

●

苦難の痕跡に声が重なるというできごとが、じつは宗教の聖典を読むという行為のさなかに起きているといえば、にわかには理解しがたいかもしれない。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、そして仏教。これらの宗教は、はるかなる過去に文字として刻みこまれた〈起源の声〉の痕跡を、聖典として有している。だれのものとして特定しえないその声の痕跡に、現在の自身の声を重ねるとき、記された文字と、自身の経験の重なりから、神が、仏が現れてくる。このとき宗教は自身の生命を呼び起こす。文字となった聖典が声になるところに聖典の意義があること、それは近年になって研究者が注目しはじめた宗教のきわめて重要な特徴である。

現在の声のみがあればよいのではない。過去に刻みつけられた文字が歴史のなかに残され、それがあらためて現在において声となること、つまり過去の痕跡に現在の声が重なることが枢要（すうよう）である。現在の声は、痕跡が刻まれた聖典の起源からつねに隔たり遅れている。この起源との差異、差延（さえん）こそ、過去とのあいだにおいて現在が成り立ち、声が共鳴し、存在が出現する場である。

阿弥陀仏の名を声によって称讃することを説く『無量寿経』は大乗仏教の経典に属する。大乗仏教は、古代インドにおいて、仏教の伝承が口伝から書写に転換するなかで生み出された、あらたな形態の仏教である。大乗経典は、ほんらい声としてのみ残された初期仏教経典とは異なって、内容がいったん文字として記され、そのうえで、ふたたび声にされることを宗教的実践の前提としている。この経典は、苦難の痕跡に立って、それを声に変えて証言しようとする、生き延びたものたちの努力と同様の、他者への態度をもっている。経典の文字という過去の痕跡は、現在の声となって意識のなかにある経験の痕跡へと届く。そのとき、凍結された過去の経験は、経典に刻まれていた、仏という存在として誕生する。大乗経典は、過去の痕跡としての文字と、現在の声とのあいだの隔たりにおいて、仏が誕生する世界の出現だったのである。

（しもだ　まさひろ・東京大学文学部教授）

著書に『涅槃経の研究――大乗経典の研究方法試論』春秋社